謎は解かないのでディナーにしましょう

目瞭然

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
謎は解かないのでディナーにしましょう

【Ｎコード】
Ｎ２６９３ＢＡ

【作者名】
目瞭然

【あらすじ】
『推理しない探偵』が推理しない話です。
事件の謎は解き明かされません。
だからおよそ推理モノではないです。
コメディーと迷いました。
ちなみに『●解きはディナーの後で』とは一切関係ありません。
ついでにディナーも関係ありません。

?

とある旅館で、真冬の乾いた空気を切り裂くような、甲高い悲鳴が上がった。声の主は宿泊客の女。彼女は窓の外、雪の降り積もった地面を指差していた。その指と視線の先には、真っ白い布にぽっかり開いた穴のごとく、真っ赤な血溜まりが存在していた。

人が死んでいた。

◆◆◆◆◆

「警察が来ないってどういうことだ！」

旅館のロビーに客達の怒声が響く。

ロビーには宿泊客十三人に従業員十人、旅館にいる全ての人間が集められていた。が、狭苦しさは感じられない。旅館であるから元々広くはあるのだが、今は従業員がフロント近くに集まって小さくなっており、その先頭にいる旅館の主人に、客の半数近くが詰め寄っているため、むしろ開放的ですらあった。しかし、空気は険悪極まりなく、悪いことこの上ない。

「それが、その、昨日の大雪のために、道路が通れなくなっているそうで、当旅館は街からも距離があり、到着は早くて、今日の夜に――」

もはや泣きそうな旅館の主人に、しびれを切らした若い金髪の男

がつかみ掛かった。

「ふざけんじゃねえ！　今は朝だぞ！　そんな長い間、こんなとこにいられるか！」

彼の言葉に、彼の連れ達が同調する。

「俺達は帰る！」

「ま、待って下さい。これだけ雪が降り積もっていては、車では……。それに、警察の方からも皆様をここに留めておくようにと――」

「うるせえ！　放せよ！」

主人は金髪男の服をつかみ、金髪男は振りほどこうと暴れる。徐々に揉み合いの様相を呈していく彼ら。他の客も声を張り上げ『帰りたい』と訴え、子供は泣き出した。

そんな時、パン、と手を叩く音がした。

「皆さん落ち着いて下さい」

それはあまり抑揚のない声で、場違いな感じさえあり、驚きで場が静まる。

「焦っては犯人の思う壷かもしれません。……あ、ちなみにこれは殺人です。今ちょっと見てきたので、間違いなく」

丸眼鏡をかけたその男の何気なく言った言葉に、ロビーにいたほぼ全員が息を呑む。

殺人。

「な、何だてめえは！」

金髪男がひっくり返った声を張る。

「みょ、妙に落ち着きやがって！　まさか、お前が犯人か！」

「いいえ、私は探偵です」

唖然。今度ばかりは金髪男も二の句が継げない。口を開けたまま、硬直している。

「き、金田一様は探偵でいらっしゃったのですか」

代わりに口を開いたのは旅館の主人だった。

探偵で『金田一』。何ともそれっぽい名前だ。

「ああ、いや、金田一は偽名ですよ。そんなそれっぽい名前の探偵がいるわけないじゃないですか」

言いながら、男は眼鏡を外す。そうして顕になった男の顔に、金髪男と他数名はまたも息を呑んだ。

「私の名前は江戸川小五郎、人呼んで『推理しない探偵』です」

『推理しない探偵』江戸川小五郎。彼は、殺人事件の場にたまたま居合わせ、それを早期解決に導いたことでマスコミに取り上げられ、また、その強烈な名前、そして整ったルックスも相まって、一躍時の人となった男である。

有名人。つまり、あの眼鏡は変装道具。

「ふむ、どうやら私のことを知っている方もいるようですね。話が早くて助かります。それでは事件の整理に移りましょう」

彼は再び、似合わない眼鏡をかけた。

◇◇◇◇◇

「ふむ、つまりこうですね。

被害者は西郷剛（さいごうつよし）、三十五歳、男性、自称・小説家。ここでの宿泊期間は三ヶ月弱。代金は滞納気味。

鋭利な刃物で首を一突きにされており、他には目立った外傷は見受けられなかったため、それが致命傷と思われる。凶器は見つかっていない。

殺害現場は、ここの敷地内。旅館を出た先の、駐車スペースとは反対側にある空きスペース。建物からも十メートル以上離れた所で殺されていて、そばに立木などもなく、周りには本当に何もなかった。

私が調べた時、あの寒さに晒されていたにも関わらず、死体が完全には硬直しきっていなかったので、殺されてから一時間も経っていなかったと思われる。ただ……」

流暢に話していた明智が急に言葉を濁した。

「奇妙なことに、私が死体を確認しに行った時、靴跡が一セットしかなかったんです」

「一セット？」

口を挟んだのはあの金髪男。

「そう。雪は今日の二時には止んでいたことが分かっています。だから普通靴跡は二セット以上残らないとおかしいんですが……」

「ん？　行き二人分、帰り一人分で、最低三セットだろ？」

「帰りは行きにつけた靴跡をなぞれば二セットで済むでしょう。君は馬鹿だね小泉君」

「この野郎……！」

金髪男こと小泉は青筋を浮かべる。そんな彼を牽制するかのように、明智は手を前に出し、人差し指を立てる。

「しかし、靴跡は一セット。つまり――」

「自殺か！」

「殺人だって言ったでしょう、馬鹿」

「……っ！！」

「現場に凶器がなかったとも言ったでしょう、馬鹿」

小泉は歯を食いしばって怒りを堪えていたが、突然表情が明るくなった。

「し、自然に消えるものを使ったんじゃねえか？　氷とか！」

「そうだとしても、自殺ではありませんね。……手に、血がついていませんでしたから」

「……血？」

「一滴もね。自殺ならどうしたって返り血がつくでしょう。だから、自殺ではない。つまりこれは、密室殺人事件で――」

「ちょっと待て」

と、ここへ来て小泉が話を中断させた。

「何ですか？」

「その話長くなる？」

「は？」

何を言っているんだ、とばかりに視線を向ける明智。しかし、向けられている小泉は不敵に笑う。

「ふっ、へへっ。『密室殺人事件』か。そういうことなら俺達は犯人候補から除外されるぜ」

疑問符を浮かべ、首を傾ける明智。それを見て、小泉はますます口角を吊り上げる。

「だってそうだろ？　俺達がここへ来たのは二日前だ。あの西郷とかいうオッサンに会ったのも一昨日が初めてだ。動機がない。なあ皆」

小泉が言うと、彼の連れ、畠山（男）、藤原（女）、平塚（女）の三人が首を縦に降る。

「それに俺達は大学卒業記念の旅行に来ただけだから、特別な物は何も持って来てないぜ。殺す理由も、道具もない。疑うんなら、俺達の部屋を調べてもいいぜ。ついでに頭もないしな！」

何故か自信満々な小泉に、明智は頷きを返す。

「成る程、一理あります」

「だろ！　じゃあ俺達帰ってもーー」

「そ、そういうことなら、私達だってそうだ！　ここに来たのはただの家族旅行だし、殺された彼とも面識はな、い……」

と、口を挟んだのは松平家のお父さん、松平拓哉。言葉尻が弱まったのは、喋りを邪魔された小泉が思い切り睨んだ所為だ。

「俺なんて近くに釣りしに来ただけだぞ！」

俺こと織田康文も叫ぶ。

「私達だってあんな人知らないわ」

「ここにも仕事で来たんだし」

雑誌記者の安室、樋口も追随する。

「……神谷さん達はどうですか？」

明智が尋ねると、神谷老夫婦は頷いて答えた。

「ふむ、これで宿泊客は全員被害者に面識はないと主張したわけですね。もちろん私もありません。となると……」

言いながら、明智はフロント近くに集まっている従業員達を見遣る。

「あなたたちが俄然怪しくなってくるわけですね。西郷さんは宿賃も滞納していたそうですから、動機もある」

明智の言葉に従業員達は身を縮める。

「……そんな、一ヶ月ほどの宿賃の滞納を動機だなんて……」

旅館の主人が反論を口にしかけるも、言葉は途中で消えていった。もしかしたら、宿賃以外にも思い当たる節があるのかもしれない。

「ふむ、現状ではあなた達が最も怪しいようです」

それを聞き、旅館の主人を筆頭に、従業員達が顔を青くする。対して宿泊客の面々は、一様にほっと息をついている。

「なあ、探偵さんよ。そういうことだから俺達帰ってもいいか？」

小泉が明智に尋ねる。

「ふむ、そうですねえ……」

明智はしばし黙考する。そして、辺りを見回し、

「犯人はあなただ！　小泉君」

と、唐突に叫んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2693ba/

謎は解かないのでディナーにしましょう

2012年1月6日22時47分発行